

## 刊行のことば

世界は一刻も休んでいない。しかも、今日は、交通通信の発達により、国境を越えた人、物、金、情報等の流通がますます活発になりつつある。いわゆるグローバリゼーションの流れの中で、世界各国の社会経済は、過去には見られなかったような速さで変化しつつある。農業といえども、その例外ではあり得ない。

日本の農業も、独自の条件をもっているとはいえ、世界の農業とのつながりは、ますます大きくなっている。世界とともに考え、世界とともに伸びるのが、日本農業の今日の使命である。この叢書の目的とするところは、まさにこの使命を忠実に実行するところにある。

---

### 編集委員

安藤光義	鈴木宣弘
池上彰英	立川雅司
大山利男	三石誠司

(五十音順)

## 何故、食品原材料価格は 再び上昇したのか？

解題/翻訳 三石 誠司

解題 .....	1
何故、食品原材料価格は再び上昇したのか？ .....	5
イントロダクション .....	5
何故、気にする必要があるのか？ .....	11
食品原材料価格の上昇に寄与した多くの要因 .....	15
グローバル・マクロ経済要因 .....	17
農業関連マーケットの進化 .....	22
インパクト .....	38
見通し .....	40
結論 .....	43

## 解題

三石 誠司  
(宮城大学教授)

本稿は、2011年6月に公表されたアメリカ農務省経済調査局 (USDA-ERS) のロナルド・トロッスル (Ronald Trostle) 他による報告書、「何故、食品原材料価格は再び上昇したのか？」(Why Have Food Commodity Prices Risen Again?) の全訳である。報告書自体は全体で29ページと比較的短い内容であるが、穀物や油糧種子の価格および需給動向に関心を持つ者だけでなく、世界の食料需給動向全体に関心をもつための基礎的な内容が手際よくまとめられているため「のびゆく農業」の1冊として訳出を試みた次第である。

多くの人にとって2008年の穀物価格の急騰は記憶に新しいと思う。世界的な穀物価格の上昇はわが国でも広く報道されただけでなく、食料自給率との関係で様々な議論が行われてきたことも周知のとおりである。このときの価格急騰自体は2008年末には下落し、一度は落ち着いたものの、その後の穀物価格は2010年6月以降再び上昇している。わが国が東日本大震災の影響で大混乱していたこともあり、2011年の春先には、あれだけ国中が騒然となった2008年夏よりもいつのまにか高い水準に到達していたことは意外に知られていない。

これは非常に興味深い状況であるため、具体的な数字を示してみたい。例えば、2005年を100とした国際通貨基金のFood Index (毎月公表) で見た場合、2008年6月のピーク時には179.71であったが、同年12月には119.60まで低下している。それが2010年6月頃から再び上昇に転じ同年12月には176.43と2008年のピーク時とほぼ同水準、2011年4月には190.88にまで上昇している。先に述べたとおり、この報告書が出された時期(2011年6月)は、東日本大震災という未曾有の大災害から3か月程度しか過ぎていない。さらに、指数が最高を付けた時期は北半球の春、国際穀物マーケットの価格動向という面では、2011

年夏の北米の作付け前でもあり、世界的に不透明感がかなり高まっていた。価格高騰にはこうした様々な要因が影響していたことがわかる。幸い、2011年春から夏にかけてはアメリカを中心とする北半球の穀物生産が比較的順調だったこともあり、価格指数は徐々に下落し、2011年11月には164.35、同年12月には161.51となっている。

さて、解題の本文に戻る。問題は我々には良くも悪くも「喉元過ぎれば熱さを忘れる」傾向があるのではないだろうか。その意味で、この報告書で記されている様々な価格変動要因をひとつひとつ理解していくことは、今後のマーケットの動向を見る上でも有益であると思う。以下、本報告が提示しているユニークな点をいくつかにかけて簡単に紹介したい。

第1に、価格変動を見る場合には、対象となる期間をどの程度に定めるかが重要となる。この報告書では過去40年間で5つの期間に分けた上で、詳細に検討している。特に興味深い点は、1972-74年の価格上昇と2002-08年の価格上昇の共通点として、この両期間の上昇では価格が下落後もそれ以前の水準には戻っていないということが明確に示されている。同様の点は、既に穀物価格の推移を大きくとらえた複数の論稿で指摘されているが、長期の価格推移グラフから見て直観的に価格水準が変わったという指摘が多い中で、個別の価格変動とその背景をひとつひとつ検証した上で結論を出している論考は少ないのではないかと思う。

第2に、マクロベースでみた場合、穀物や油糧種子の価格高騰原因は、伝統的な最大要因である天候や影響に加え、世界レベルでの人口や所得の増加、1人当たりの動物製品消費の増加、エネルギー価格の上昇やバイオ燃料の増加、そして農業生産性の伸びが鈍化していることや、アメリカ・ドルの価値の低下など様々なものがある。これらは皆、よく知られた項目であるが、ここでは本報告書の中で示されたユニークな視点を1つだけ紹介しておきたいと思う。そ

れは2002-08年の期間における価格上昇の中で、バイオ燃料の増加による影響をどの程度と考えるかという点である。

本報告書では、この期間における「…食品原材料価格の上昇理由の多くをバイオ燃料の生産に帰することは非現実的…」と述べている。その理由は、2008年下半期にはバイオ燃料の生産が増加し続けたにも拘わらず、作物価格は30%以上下落し、「…非農産物価格は農産物価格以上に上昇し、(エタノール生産のための)トウモロコシ価格はコメや小麦(バイオ燃料の原料ではない)ほどには上昇しなかった…」という現実のマーケットの動きからの観察によるものである。中長期的に見れば、明らかにバイオ燃料需要増加に伴う穀物生産増加が穀物価格の上昇に影響していることは疑いないのであろうが、我々は価格が上昇したときにすべてを「バイオ燃料のせい」にするような短絡的な発想は厳に慎まなくてはならないことが具体的な価格の動きにより示されていると思う。

第3に、2002-08年の価格上昇と、2010-11年にかけての価格上昇については多くの共通要因が存在したが、個別要因が作用したタイミング、作用の順番、そして相対的な重要度が皆、異なっているということである。当たり前のような結論であるが、これをひとつひとつ解きほぐしていくのが我々の仕事ではないかと思う。

最後に、本報告書には本文とともに4つのコラムの形で報告書のバックグラウンド知識となる内容が紹介されている。いずれも興味深い内容であるため、是非、基礎的な知識として読みこんで頂ければと思う。訳者としては、特にコラム4「スペキュレーション(投機)のスペキュレーション(熟考)」は自らが長年関わってきた業界であるにも拘わらず、適切な日本語が存在せず、カタカナ表記(例えばヘッジャー:農産物に限らず、株や金融商品など価格が変動するものに対してリスク回避を目的として先物取引に参加する人や企業)が多くなったため、返って読みにくくなってしまったのではないかとも思うが、ご容

赦を頂ければと思う。

\* \* \*

なお原文のタイトルを見てもわかるとおり、訳者は Food Commodity を食品原材料と訳出したことを、あえて断っておきたい。コモディティは既に日本語化している気がしないでもないが、ここでは全て食品原材料という用語で統一して用いている。

また、本稿の原文はアメリカ農務省経済調査局のウェブサイトで購入可能である。(アドレス: <http://www.ers.usda.gov/Publications/WRS1103/WRS1103.pdf>)。翻訳においては可能な限り原文に忠実になるように努めたが、部分的にはかなりの意識を施したところもある。訳文の間違いは全て訳者の責任である。必要な場合には、是非、上記アドレスの原文に当り、原文のニュアンスを取って頂ければと思う。

2011年6月にこの報告書を見た際、すぐにでも訳出したいと考えたのであるが、その後多忙にかまけ、2012年を迎えてしまった。こうした「生モノ」のような報告書は可能な限り早く訳出し紹介することが訳者のような仕事についている者の責任だと深く思いながら、最終的な仕上がりが遅れたことは全て訳者の責任である。この場を借りて深くお詫び申しあげたい。